佳作

父の想い

鹿児島県　霧島市立舞鶴中学校一年　安﨑　健翔

私の父は十年前、三十九歳の若さで、天国へ旅立ってしまった。当時、私はわずか二歳だった。百八十五センチメートルと大きな身体に肩車されたこと、野球が上手だった父にキャッチボールを教えてもらったことはあるようだが記憶に残っていない。写真を見て現実にあったことだと理解するのみである。物心がついた頃から父がいない悲しさは感じていたが、この夏になるまでは父の立場になって考えることはなかった。

七月の下旬、愛知県から帰省した従兄弟、祖母、叔母と共に南九州市にある知覧特攻平和会館へ行った。第二次世界大戦末期の沖縄戦において特攻という人類史上類のない作戦で、爆装した飛行機もろとも敵艦に体当たり攻撃をした陸軍特別攻撃隊員の遺品や関係資料を展示している場所である。コロナ禍で数年会えていなかった従兄弟と一緒に過ごせると弾んでいた気持ちが、語り部の講話が終わる頃にはどこかへ消えてしまっていた。講話の中で、特攻隊に入隊した最年少は十七歳だったと聞いた。私は戦争に恐怖しかないので数年後に入隊するなんて考えられない。いつの時代でも戦争は死を覚悟しなければならず、できれば避けたかったはずである。それでも志願したのは何故なのだろうか。講話を聞く中で、それは家族や好きな人を守る為だったのではないかと思った。

隊員の一人、穴澤利夫大尉は結婚を約束していた恋人へ遺書を残していた。そこには、これまでの御礼や恋人の幸せを願う以外何物もないこと、過去に生きるのではない等と書かれていた。出撃前に恋人から贈られたマフラーを巻き飛び立った。穴澤大尉の気持ちが知りたくて、何度も遺書を読み返した。隣にいた祖母は涙を流していた。きっと私の父と母を重ねて聞いていたのだろう。祖母は、

「健翔の父親も亡くなってしまったけれど、あなた達のことを大切に想っていたと思うよ。」

と言った。

父は私、母、そして母のお腹の中にいた弟との別れをどのような想いで受けとめたのだろう。きっと心残りであったに違いない。子どもが大人になるまで生きることができず、ごめんね、と謝っていたのだろうな。でも私達の未来に希望を持っていたと思う。母が、

「名前は父からの最初の贈り物だよ。」

と話したことがある。人としての土台をしっかり持ち、健やかに成長し、自分の夢に向かって羽ばたいて欲しい想いが込められているのだと。

特別攻撃隊員や父のように好きな人を残し亡くなった人の為にも、平和に感謝しながら精一杯生きていきたい。